

IV 令和2年度 研究開発実施状況

1 事業の実施期間

令和2年 4月20日（契約締結日）～ 令和3年 3月31日

2 指定校名・類型

学校名 三重県立飯南高等学校
学校長名 土方 清裕
類型 地域魅力化型

3 研究開発名

「チームいいなん」の挑戦 ～未来を切り拓く“地域に根ざした人材”育成～

4 研究開発概要

本事業では、地域が抱えている諸課題の解決や持続可能な社会の実現に向け、地域を学び場とした地域課題解決型のキャリア教育の実践を通じて、自ら考え挑戦したり、多様な価値観を持つ人々と対話・協働したりしながら、地域への愛着を持って、地域に貢献し、地域の未来を切り拓くことのできる、地域に根ざした人材を育成することを目的とし、必要な資質・能力を育むためのカリキュラム開発に取り組んでいく。

<地域に根ざした人材に必要な資質・能力>

- ①地域に飛び出し、地域住民や職業人等、様々な立場の人々、世代を越えた人々の思いや考えを聴き取り共感しながら、コミュニケーションできる力【対話力】
- ②地域の伝統文化や産業、魅力等について調べたり体験したりすることを通じて、課題や改善点を把握・整理する力【追究力】
- ③自らの技術を磨き、他者とかかわり合いながら、仮説を立て、地域課題の解決に向けた取組や活動を創造する力【創造力】
- ④地域課題を解決するための具体的な提案や活動等を効果的に発信する力【発信力】

<カリキュラム開発の方向性>

- ①総合学科の柱に位置付けている3科目、「産業社会と人間（1年次必履修科目）」、「キャリアデザイン（2年次学校設定科目）」、「いいなんゼミ（3年次総合的な学習の時間）」を再構築し、3年間の学びの連動の強化を図る。
- ②4系列（郷土・環境、介護福祉、コンピュータ、総合進学）の特色を活かした地域貢献のための学習活動の充実を図る。
- ③各教科・科目で地域の題材やデータを扱うなど教科横断的な学習を実施し、日常的な学びと地域・社会との連動を図る。

5 教育課程の特例の活用の有無

無し

6 管理機関の取組・支援実績

(1) コンソーシアムについて

① コンソーシアムの構成団体（地域人材育成コンソーシアム・いいなん）

機関名	機関の代表者名
三重県立飯南高等学校	土方 清裕（校長）
松阪市企画振興部	野呂 隆生（地域振興担当理事）
松阪市飯南地域振興局	榊原 典子（局長）
松阪市飯高地域振興局	高木 達彦（局長）
松阪市教育委員会	中田 雅喜（教育長）
松阪市西部教育事務所	中林 穰太（所長）
松阪市立飯南中学校	中村 元亮（校長）
松阪市立飯南高等学校	森井 義和（校長）
松阪市粥見住民協議会	中野 孝是（会長代理）
松阪市宮前まちづくり協議会	向坂 文一（事務局長）
株式会社三ツ知製作所	堀出 一（業務部部長兼生産管理課課長）
有限会社深緑茶房	松本 浩（茶長）
叶林業合名会社	堀内 楓子
有限会社上野屋	佐々木 幸太郎（代表取締役）
NPO法人 i sierra（アイシエラ）	太田 覚（理事長）
三重大学地域イノベーション学研究科	西村 訓弘（副学長・教授）
三重県立飯南高等学校・同窓会	高橋 克良（会長）
三重県立飯南高等学校・PTA	中村 誠（会長）
三重県教育委員会事務局教育政策課	上村 和弘（課長）
三重県教育委員会事務局教育政策課	津村 尚美（主幹）

② 活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和2年7月6日	第1回会合 ・昨年度事業の活動評価（昨年度末コロナ禍で中止の為） ・今年度の実施計画を共有するとともに、コロナ禍における地域でのフィールドワークやキャリアインターンシップの支援体制について協議
令和2年7月14日	第1回フィールドワークにおけるバス配車 「いいなんゼミ」の指導・助言
令和2年7月25日	地域みらい留学フェスタ（オンライン）の参観 *管理機関・飯南地域振興局が参加
令和2年7月30日	地域との協働による高等学校教育改革推進事業担当者会議（オンライン）に出席 *管理機関・飯高地域振興局が参加
令和2年8月23日	地域みらい留学フェスタ（オンライン）の参観 *管理機関が参加
令和2年7月、8月 （夏季休業中）	「キャリアデザイン」における地元企業へのキャリアインターンシップの受け入れ（28名）
令和2年9月8日	「いいなんゼミ」の指導・助言
令和2年10月14日	キャリアインターンシップ発表会の参観 *都合のつく委員が参加
令和2年10月28, 29日	第2回フィールドワークにおける活動先の紹介、受け入れ、バス配車等
令和2年11月17日	第2回フィールドワーク発表会の参観 *都合のつく委員が参加

令和2年11月26日	大正大学地域創生学部教授浦崎太郎氏との意見交換 ・地域での探究活動の進め方や、かけ算による価値創造について意見交換・助言
令和2年12月1日	第2回会合 ・キャリアインターンシップに関する意見交換 ・地元企業での「大人のフィールドワーク」の模索 ・本年度活動について協議 ・コミュニティ・スクールについて情報共有
令和2年12月9日	ふるさと看板プロジェクトの助言
令和3年2月10日	いいなんゼミ発表会の参観（オンライン） *都合のつく委員が参加
令和3年3月18日	第3回会合 ・今年度の取組報告と活動評価 ・コミュニティ・スクールの方向性について

(2) カリキュラム開発等専門家について

①指定した人材・高等学校における位置付け

一般社団法人まなびと代表理事 江森真矢子 氏 月1回程度オンライン会議
まちげい KNOT 代表、豊岡短期大学非常勤講師 浅野吉英 氏

月1回程度オンライン会議・2ヶ月に1回程度来校

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和2年7月1日 (江森、浅野)	第3回作業部会に出席（オンライン） ・第1回フィールドワークおよびキャリアインターンシップの活動内容について協議
令和2年7月6日 (江森、浅野)	第1回地域人材育成コンソーシアム・いいなんに出席（オンライン）
令和2年7月29日 (江森、浅野)	第4回作業部会に出席（オンライン） ・第1回フィールドワークおよび魅力マップの反省 ・4系列の学びと地域探究的なカリキュラムの助言
令和2年8月25日 (江森、浅野)	第5回作業部会に出席（オンライン） ・キャリアインターンシップの反省 ・キャリアインターンシップ発表会および本気の大人講演会について協議 ・いいなんゼミ大人の伴走について助言
令和2年10月7日 (江森、浅野)	第6回作業部会に出席（オンライン） ・第2回フィールドワークの活動内容について協議 ・探究活動の評価について助言
令和2年10月13日 (江森)	本校生徒主催「日本一を考える会」に出席
令和2年10月23日 (江森、浅野)	第1回地域協働カリキュラム推進委員会に出席 ・第2回フィールドワークの活動内容の情報共有 ・いいなんゼミ報告書について協議 ・ふるさと看板プロジェクトについて情報交換
令和2年10月24日 (江森、浅野)	探究活動やふるさと看板プロジェクトの助言
令和2年11月25日 (浅野)	ふるさと看板プロジェクトの助言（オンライン）
令和2年12月1日 (江森、浅野)	第2回地域人材育成コンソーシアム・いいなんに出席
令和3年1月7日 (江森、浅野)	第2回地域協働カリキュラム推進委員会に出席（オンライン）

	・いいなんゼミ発表会およびポスターセッション・作品展示の日程について協議
令和3年2月10日 (江森、浅野)	いいなんゼミ発表会の参観および活動評価 (オンライン)
令和3年3月12日 (江森、浅野)	第3回地域協働カリキュラム推進委員会に出席 (オンライン) ・今年度の取組報告と次年度反省 ・事業アンケート結果に対する意見交換
令和3年3月18日 (江森)	第3回地域人材育成コンソーシアム・いいなんに出席

(3) 地域協働学習実施支援員について

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

松阪市地域おこし協力隊 横山陽子 氏 週1回程度打合せ

松阪市地域おこし協力隊、Takasugi atelier 代表 高杉亮 氏

週1回程度打合せ

- ・地域おこし協力隊として松阪市が初めて雇用した横山氏は令和元年10月に着任。高杉氏は松阪市2人目の地域おこし協力隊で令和2年10月に着任。

②実施日程・実施内容

日程	内容
令和2年5月8日 (横山)	空き家片付けプロジェクトの引継会議
令和2年6月30日 (横山)	第1回フィールドワークの事前指導
令和2年7月6日 (横山)	第1回地域人材育成コンソーシアム・いいなんに出席
令和2年7月14日 (横山)	第1回フィールドワークで「有間野地域」へ同行
令和2年7月25日 (横山)	地域みらい留学フェスタ (オンライン) に参観
令和2年9月20日 (横山)	空き家片付けプロジェクト (赤桶地域) へ同行
令和2年10月5日 (横山、高杉)	管理職と打合せ、学校の概要説明等
令和2年10月11日 (横山)	空き家片付けプロジェクト (赤桶地域) へ同行
令和2年10月23日 (横山、高杉)	第1回地域協働カリキュラム推進委員会に出席
令和2年10月28, 29日 (横山、高杉)	第1回フィールドワークで「有間野地域」および「宮前地域」へ同行
令和2年10月30日 (横山)	地域との協働による高等学校教育改革推進事業全国サミットを傍聴 (オンライン)
令和2年12月1日 (横山、高杉)	第2回地域人材育成コンソーシアム・いいなんに出席
令和3年1月7日 (横山、高杉)	第2回地域協働カリキュラム推進委員会に出席 (オンライン)
令和3年1月25日 (高杉)	社会科学入門受講生徒への指導
令和3年1月26日 (横山)	社会科学入門受講生徒への指導
令和3年2月10日 (横山、高杉)	いいなんゼミ発表会の参観
令和3年2月16日 (横山、高杉)	社会科学入門研究発表会の参観
令和3年2月20日 (横山)	空き家でのカフェ開催を見据えた商品作りの指導
令和3年3月12日 (横山、高杉)	第3回地域協働カリキュラム推進委員会に出席 (オンライン)
令和3年3月18日 (横山、高杉)	第3回地域人材育成コンソーシアム・いいなんに出席

(4) 運営指導委員会について

①運営指導委員会の構成員

氏名	所属・職	備考
西村 訓弘	三重大学副学長（社会連携担当） 三重大学地域イノベーション学研究科教授	学識経験者
浦崎 太郎	大正大学地域創生学部教授	学識経験者
吉仲 繁樹	三重県商工会連合会専務理事	産業界
橋本 純	三重県漁業士 三重県海水養魚協議会長	産業界
西出 覚	三重県大台町産業課主幹	行政機関
岸川 政之	(一財) 未来の大人応援プロジェクト 代表	コーディネーター
土方 清裕	三重県立飯南高等学校長	校長代表
安田 恵理	三重県立鳥羽高等学校教諭	教員代表

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和2年7月16日（第1回）	・飯南高校の取組発表及び意見交換 ・コロナ禍の中での地域課題解決型キャリア教育について
令和2年11月26日（第2回）	・志摩高校「志摩学」授業参観及び研究協議 ・地域課題解決型キャリア教育モデルの構築に向けて
令和3年3月19日（第3回）	・1年間の取組を共有し、成果や課題、次年度に向けた方向性について協議

(5) 管理機関における取組について

①管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組

- ・地域・教育魅力化プラットフォームが主催する地域みらい留学に参画するため、オンラインで行われた「地域みらい留学フェスタ 2020」の支援を行った。数回にわたるオンラインでの学校紹介では、「いいなんゼミ」の取組、美術部の「緑茶ラテアート」、応援団 Circle の活動など、地域を学び場とした探究活動を生き生きと紹介していた。また、参画費については、経済的な支援も行った。
- ・地域課題解決型キャリア教育の取組を推進している高校の生徒を対象に、一般社団法人未来の大人応援プロジェクト「全国高校生SBP交流フェア実行委員会」主催のSBP交流フェアに活動の場として支援した。飯南高等学校は応援団 Circle の地元企業と行った「木の手帳」制作について発表し、全国上位6位以内である藻谷浩介賞を受賞した。
- ・「2020 高校生地域創造サミット」は、県内の高校生を対象に地域のことを主体的に考え行動する意欲や、地域とともに課題解決に取り組む姿勢を育む機会として計画した。今回は、地域の学び場として、飯南・飯高地域の企業経営者“本気の大人”との出会いを考えていた。飯南高校の生徒も自らの学びと、地域をアテンドすることを目的に、たくさんの生徒が申し込みを行っていたが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止となった。
- ・地域人材育成コンソーシアム・いいなん第2回運営委員会において、委員同士が互いの職場を訪問し、地域の仕事をリアルに知ろうと提案された。生徒の探究だけでなく、大人が探究をしようという気運が生まれている。

②事業終了後の自走を見据えた取組

産官学が協働し、地域を学びの場とした活動を推進していくために、令和3年度より飯南高校をコミュニティ・スクールに指定する予定である。このことで、飯南・飯高地域において、小・中・高がコミュニティ・スクールで緩やかにつながるようになる。松阪市との連携が一層密になることと、地域との協働体制の持続可能性が高まることを期待している。また、令和2年度に公表された松阪市の総合計画（令和2年度～令和5年度）に、中山間地域の振興の一環として飯南高校の魅力化に取り組むことが記述された。

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況

令和2年7月2日に高田短期大学との「高大教育交流協定」を締結した。令和2年度はこの枠組みを使い、「いいなんゼミ」で保育士を希望している生徒の指導に講師を複数回にわたって派遣していただいた。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
「産業社会と人間」における地域探究学習	4回	3回	3回	4回		1回	3回	3回	1回	3回	3回	
「キャリアデザイン」における地元や地域を知る活動および素晴らしいなんゼミ	4回		3回	3回	3回	3回	1回	1回	1回	3回	3回	1回
「いいなんゼミ」における地域課題解決にむけた探究活動	4～12月の毎週火曜日1時限分、金曜日2時限分で、それぞれのゼミに分かれて探究活動を行った（臨時休業期間前に事前指導を行い、臨時休業期間は生徒個人の自宅活動を主とした）。7月に中間報告、12月に最終報告を行った。最終報告で内容が評価されて学年代表となった生徒は、2月の「いいなんゼミ発表会」に向け、活動内容を精査していく予定である。											
学校設定科目「社会科学入門」での地域課題学習	2回	2回	5回	2回		3回	3回	2回	2回	3回	3回	
授業改善のための教員研修			1回							1回		

※4、5月は臨時休業期間のため、当初予定回数をみえ消しとした

(2) 実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容

本研究では、①総合学科の柱に位置付けている3科目（「産業社会と人間」「キャリアデザイン」「いいなんゼミ」）の再構築、②4系列の特色を活かした地域貢献のための学習活動の充実、③探究的な学びを進める授業改善、の3つを柱として取り組んでいるところである。

①については、1年次「産業社会と人間（総合学科必履修科目）」は、昨年度初実施のフィールドワークの反省点を踏まえて深化させた。1学期は自分の足で歩き、自分の目を見て地域の魅力を発見し、2学期は1学期と同じ地域の魅力を深く掘り下げた。地域の方への聴き取りは、生徒自らで約束を取る方法を取り、生徒の主体的選択で活動を進める仕掛けとした。3学期は「かけ算プロジェクト」と銘打ち、

これまでの活動で興味を持ったものと他地域・他分野とを比較した活動を進めた。2年次「キャリアデザイン（学校設定科目）」は、新型コロナウイルス感染症の影響で企業見学や修学旅行等が中止・延期となり、従来の計画を大きく変更することとなった。その中で、地元企業と夏季休業中に連携して実施予定だったキャリアインターンシップは、地元企業・地域の温かい協力があって、今年度は35.4%の生徒が飯南・飯高地域で体験を行うことができた。また、昨年度からの商工会議所との連携において、今年度も引き続き「高校生と地元企業との交流会」を開催し、地元企業の仕事内容ややりがい等についてさらに知る機会とした。3年次「いいなんゼミ（総合的な学習の時間）」では、4、5月の臨時休業期間に入る前に学年間で意識付けを行い、オンラインで教員と相談できる環境をわずかではあるが整えた。また、外部の大人を伴走者として繋げ、専門的な学びを受けてさらに探究活動を進めていくことも行った。

②については、コロナ禍によって当初計画していたイベントや福祉施設実習等の活動を自粛せざるを得ない状態が続いた。その中で、昨年度フィールドワークにおいて福祉施設での体験を行った生徒が在籍する介護福祉系列では、地域包括支援センターと連携して松阪市の介護福祉の現状を学んで課題点をまとめたり、認知症サポーター研修を受けたりなど、将来を見据えた学びを実施した。そして総合進学系列では、高大連携授業で地域を軸にした専門分野を学び、生徒自身の興味と地域とを掛け算する取組が進められた。また、昨年度に学校キャラクターづくりを行った生徒たちは、松阪保護司会から会報の表紙絵の依頼を受け、地域から生徒の力を求められる場面も出てきた。

③については、6月に宮崎県立飯野高等学校の梅北瑞輝教諭とオンラインで繋ぎ、生徒の自走した探究活動やその結果、生徒や校内の起こりうる変化について学び、1月には高知県立宿毛高等学校の小島大和教諭とオンラインで繋いで、日常的な授業での学び合いのスキルや振り返りの言語化についての研修を行った。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

「産業社会と人間」「キャリアデザイン」「いいなんゼミ」は総合学科の柱に位置付けている3科目であり、この連動を強化することで3年間を通じた地域課題解決型のキャリア教育の充実を想定している。令和2年度は「産業社会と人間」の深化、「キャリアデザイン」では地域の仕事や暮らしを知るためにキャリアインターンシップにおいて地元企業への体験活動を増加させた。さらに、昨年度のフィールドワークでの学びも連続性のあるものとして活かし、各系列での学習活動の充実に繋げる。

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組

昨年度から「産業社会と人間」で地域を学び場としたので、生徒は地域を自分ごととして捉えられるようになった。結果、特に介護福祉系列や総合進学系列において地域を軸にした学びを実施した際、昨年度の学びの土壌を踏まえて意見したり考察したりすることができるようになった。

④類型毎の趣旨に応じた取組

昨年度は「産業社会と人間」において2回のフィールドワークを実施し、地域に

学び場を設けたことで、地域を軸にした学びを実施する際には、例年以上に「地域の自分ごと化」が土壌としてできていることを感じられた。そのため、地域で起こっていることが具体的にイメージでき、データ活用の際にはさらに理解が深まった。また、地域の伴走者を生徒に付けることでその学びが高まり、生徒の成長も促進された。

⑤成果の普及方法・実績

今年度はキャリアインターンシップ発表会（9月）と第2回フィールドワーク発表会（11月）を実施し、当日関わっていただいた地元企業や地域の方等のべ20名ほどの参加を得て、活動内容の還流報告を行った。その活動やいいなんゼミでの探究活動、部活動・サークル活動など学校に関する報道については、数社の新聞や行政チャンネル「アイウェブまつさか」など、各メディアによって70回程度取り上げられた。活動の成果の一つとしては、応援団Circleが行った地元企業との「木の手帳」制作（「いいなんゼミ」においても生徒が改良活動を行う）があり、第5回全国高校生SBP交流フェアにおいて全国上位6位以内に入り、藻谷浩介賞を受賞した。2月には「いいなんゼミ発表会」をオンラインでも視聴できるようにし、初の対面とオンラインのハイブリッド開催を実施した。オンラインではコンソーシアムの関係者や地域住民以外にも、県内外高校や連携中学校、近隣小中学校にも視聴できるように案内を送付した。

また本事業の取組を外部に発信する機会もあり、校長が地域を学ぶ取組を始めた市内の嬉野中学校や殿町中学校で基調講演を、本事業研究担当教員が全国サミットでの分科会報告、ユマニテク教育研究所オープニングフォーラムでの実践報告を行った。この活動を通して、本事業の取組で得た学びや実践内容、生徒の成長の姿を他地域へも波及することができた。

（3）研究開発の実施体制について

①地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

昨年度から地域協働カリキュラム推進委員会を設置し、本校教員、カリキュラム開発等専門家、地域協働学習実施支援員の計12名で全体企画や指導内容を検討している。今年度は3度の委員会を開催し、昨年度の「産業社会と人間」におけるフィールドワーク内容の改善提案や、対面とオンラインのハイブリッド初開催となる「いいなんゼミ発表会」等について協議を行った。細部の内容については昨年同様に、委員会の下部組織として作業部会を設置して継続協議を行った。また、外部の折衝については委員会メンバーが中心となっており、昨年度より役割を分担して取り組んだ。

②学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制）

昨年度のフィールドワークについては、該当学年が中心となり素案を作り、それを作業部会で精査する流れができた。地元企業へのキャリアインターンシップや対面とオンラインでのハイブリッド初開催となる「いいなんゼミ」は、学年の意向をもとに作業部会で意見を出して構築する形となり、企業との連携は進路指導部を中心に対応した。また、地域協働カリキュラム推進委員会での協議内容は、職員会議

で書面として出すことで校内教員との情報共有をはかった。系列での学習活動は、系列に関係する教員で実施内容を考え、地域との関係性を構築した。また、授業改善に関する研究会は昨年度同様に本事業研究担当教員が受け持ち、管理職と共同して人選・連絡を行った。

③学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組み

地域協働カリキュラム推進委員会や作業部会において生徒の活動の様子や振り返りを共有し、反省点を協議して次年度への改善検討を行っている。さらにコンソーシアム会議や活性化協議会でも情報共有し、校内だけでなく地域の関係者にも助言・評価をいただいている。また、学期ごとにアンケートを実施してその数値を集約・共有している。

④カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組

昨年度同様に、フィールドワークにおける地域の施設や“本気の大人”の講師紹介、生徒輸送バスの運行、フィールドワークの受け入れ、ふるさと看板プロジェクトへの協働等を行った。さらに今年度は、「キャリアデザイン」における地元企業へのキャリアインターンシップに積極的な受け入れ場所の提供、「いいなんゼミ」において生徒の伴走者として指導・助言も行った。

8 目標の進捗状況、成果、評価

「産業社会と人間」について、昨年度は2度のフィールドワークを別々の地域で行い、活動内容は教員側がある程度設定していたが、今年度は同じ地域で行うとともに地域の方への連絡も生徒に行わせた。教員から心配する声もあったが、地域振興局長とともに散策をし、屋号が掛けてあるという魅力を地域住民と対話しながら探ってくるなど、昨年度には想定できない、より主体的な学びの形がみられた。同じ地域に行くことで、成果物である魅力マップでのアンケートコメントを踏まえた活動も行うことができた。地元出身生徒からは「きっと知っていることばかりだろうと思っていたが、発見もあり普段では体験できないことができた」という声があり、体験活動を通して地域を深め、そこでの偶然の出会いも楽しみながら、追究力や対話力を高めることができた。この取組の中で、地域住民が作成した「藁のモニュメント」を文化祭にお借りできるという副産物もあり、生徒の活動を通して地域との信頼関係も一層強固となった。

今年度のキャリア開発の重点である「キャリアデザイン」については、校外へ飛び出す活動が目玉であったが、コロナ禍のためキャリアインターンシップは開催が難しいとの声が校内では強くあった。しかしコンソーシアムの会議において、地元企業から「今までの信頼関係がある」「水くさいことは言うな、動いてほしい」「本物の人との出会いが大切」など温かい声をいただき、飯南・飯高地域で28名もの生徒を受け入れてもらった。生徒発表会では「この地域には地元との関わりが強い企業があり、ここからでも世界に発信することができる」「地域しかない地域ならではのことが出来ていた」という意見があり、地域の活力を感じとれたようだった。さらには感想だけにとどまらず、企業に対して商品開発の提案をする生徒も出た。また、“本気の大

人”講演会では「移住される前後で気持ちはどのように変わったのか」「新しいことを始めるときにどんな考え方をしたらいいか」といった質問が出た。昨年度における地域での学びが少しずつ線となり繋がっている印象が生徒の中からも垣間見え、地域のことを自分ごととして感じながら、自分らしく生きるための価値観と照らし合わせることが出来、学びの延長上に自身の将来を見据えていることも実感できた。

昨年度地域を学び場にした2年生は、フィールドワークでの体験から系列選択をした生徒もおり、4系列での学習活動は昨年度から軸が通った学びとなった。総合進学系列の「社会科学入門」では、行政学・教育学・経済学の視点で地域を見つめ、生徒からは「一つの視点ではなく多角的に見ることで違った学びになる」と意見が出た。また「国際社会と日本」では、地域の特産物を英語で紹介する活動を通して、「英語で伝えるためには、さらなる地域の理解が必要だ」と感じて、改めて地域を見つめ直しながら追究する姿がみられた。コロナ禍で実習先に行けなかった介護福祉系列では、地域包括支援センターと連携した学びを進めるとともに、実習施設から要請を受けて、コロナ禍で販売が低迷しているお菓子工房の販売協力を行いながら、障害者支援という実体験を積むことができた。昨年度イメージキャラクターの制作を通して地域の特産品や文化・伝統等を考察したコンピュータ系列は、地域へ発信する姿を保護司会から認められて会報の表紙絵を作成するに至り、地域から生徒の力を求められる場面も出てきた。このように、昨年度からの生徒の学びが地域にも連動して新たな動きが起き、より生徒の学びが多様になり、自然と教科横断的な学びとなって生徒が成長していった。

3年間の集大成である「いいなんゼミ」では、4、5月の臨時休業期間もあつて活動しきれなかった生徒が一定数存在した。ただその中でも、地元企業とコラボした商品開発に磨きをかける生徒や、地域を活性化しようと休業期間中から活動し、クラウドファンディングで学校文化祭に打ち上げ花火を企画して地域に笑顔を届けた生徒など、コロナ禍でも自走する姿もみられた。また、個人研究において、活動初期段階からその生徒に伴走者が見つかることで、生徒の成長が急加速することが教員間で徐々に共有されることにもなった。

今年度の授業改善については、オンライン研修を行い、高校現場の教員から探究活動や日々の授業実践を学んだ。探究活動で高校生が自走した結果を具体例で示してもらい、同じような活動をしている教員が自信をもって生徒と伴走することで全国高校生SBP交流フェアでの全国6位以内への実績へと繋がった。探究活動で全国受賞をした成果は大きく、地域の誉れとなり、「高校生が地域を動かすことができる」と評価をいただいた。また学び合いのスキルや振り返りの言語化に関するオンライン研修も行い、授業実践への活用を少しずつ行っている。

その中で、本事業の成果目標である「対話力・追究力・創造力・発信力の4つの能力がすべて身に付いたと考える生徒の割合」は、2年生において7月から12月では41.7%から46.8%と上昇した。各項目別で能力が身についたと考える生徒の割合は、7月に対話力76.4%、追究力80.6%、創造力75.0%、発信力58.3%であったが、12月には対話力80.8%、追究力76.6%、創造力71.8%、発信力76.6%と上昇傾向にあり、着実に生徒の力の向上に繋がっていると考えられる。また今年度の1年生の「4

つの能力がすべて身に付いたと考える生徒の割合」については、12月に44.0%であった。昨年度の1年生は同時期に37.3%であったので、昨年度と比較すると数値が高く、深化させた内容に一定の効果があったのではないかと評価できる。

一方、「松阪市及びその周辺地域出身の就職希望者のうち、松阪市内及びその周辺地域の事業所等に就職した割合」は75.8%（令和元年度）、72.2%（令和2年度）、また「松阪市及びその周辺地域出身の就職希望者のうち、飯南・飯高地域の事業所等に就職した生徒の人数」については、7名（令和元年度）、3名（令和2年度）となり、今年度はいずれも数値が下がった。昨年度の「地元企業との交流会」においては地元企業に好印象を持っていた生徒が多い学年であったが、地元企業への就職とはあまり結びつくことはなかった。コロナ禍により例年求人のある企業が採用を取りやめたところもあったが、「インターンシップや説明会をどのようにすると就職へ繋がるのか考えていきたい」とコンソーシアムの企業から意見もあり、インターンシップ受け入れ先との事前事後の情報交換を積極的に行う必要があると感じられた。

9 次年度以降の課題及び改善点

「産業社会と人間」は事業後3年目となり、活動内容の確立に向けてより校内で作業分担を行い、地域とも連携して取り組んでいきたい。「キャリアデザイン」は今年度実施できなかった企業見学や修学旅行も含めて自己の在り方・生き方を見つめ、他地域と自地域との比較も行いながら、対話力・追究力・創造力・発信力を高めていきたい。地元企業へのキャリアインターンシップでは、企業側から「生徒から企業に対して本音のフィードバックをしてほしい」「どのような体験を他では実施しているのか」等の意見をいただいたため、早い時期から環境整備や準備を行い、さらに連携して生徒のより良い学びの土壌を構築していきたい。また1月から行う「プレいいなんゼミ」の段階から校外の大人を伴走者として生徒に繋ぎ、3年間の集大成「いいなんゼミ」での探究活動への流れを作る必要もある。今年度は臨時休業期間があったとはいえ提案でとどまった活動もあったため、より早期に探究活動に連動させ、伴走者と協働しながら考えたことを実行に移す体験を通して生徒の能力を高めていきたい。

今年度は「産業社会と人間」における地域での学びが系列科目のモチベーションに繋がり、地域を軸として学ぶことに意味が見いだせたことから、この経験を活かしさらに他科目でも連動した学びへと昇華させ、その上で地域と連携しながら新たな価値創造ができるかを課題としたい。また、各教員で高め続けている授業力については、新たな考えるための技法についても校内で意識を共有し合いながら、探究活動のためのスキルの習得・活用を進めていきたい。